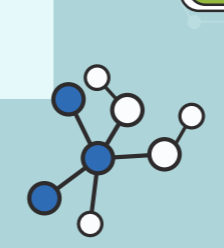
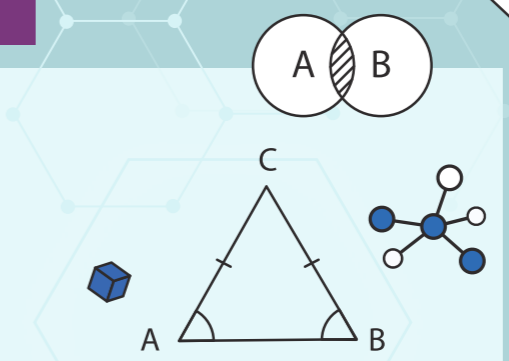
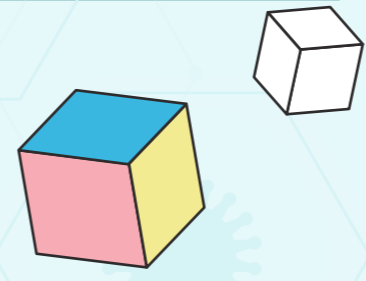
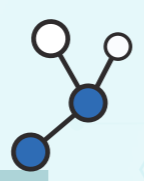
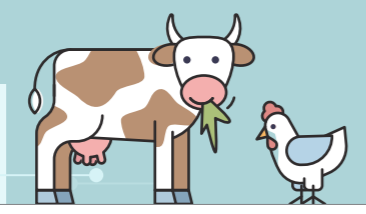
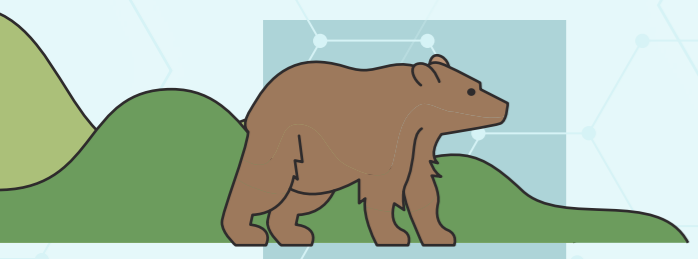
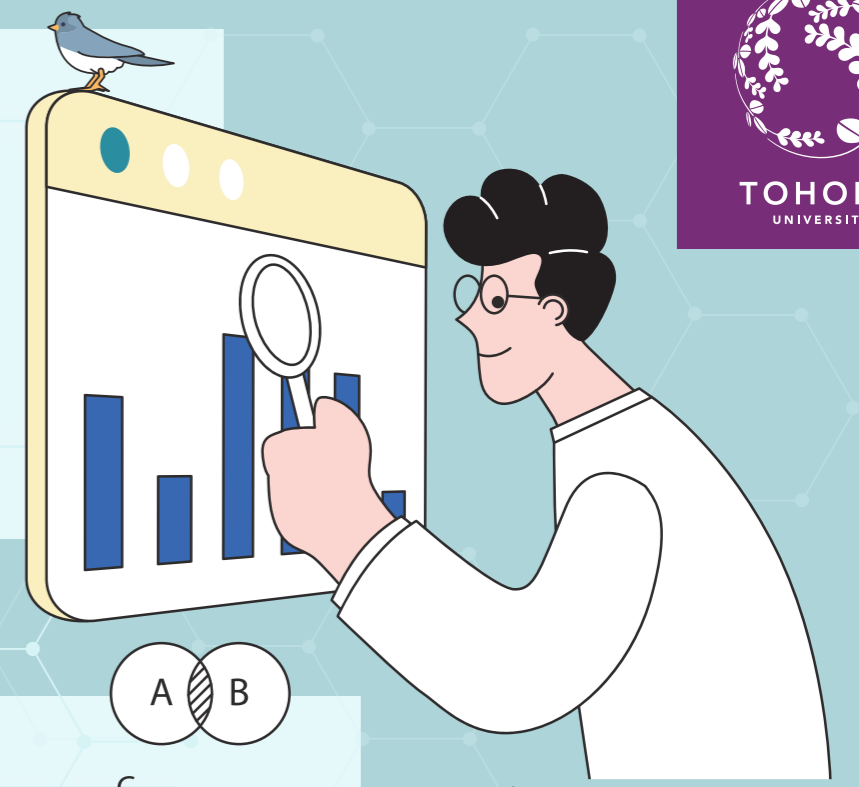
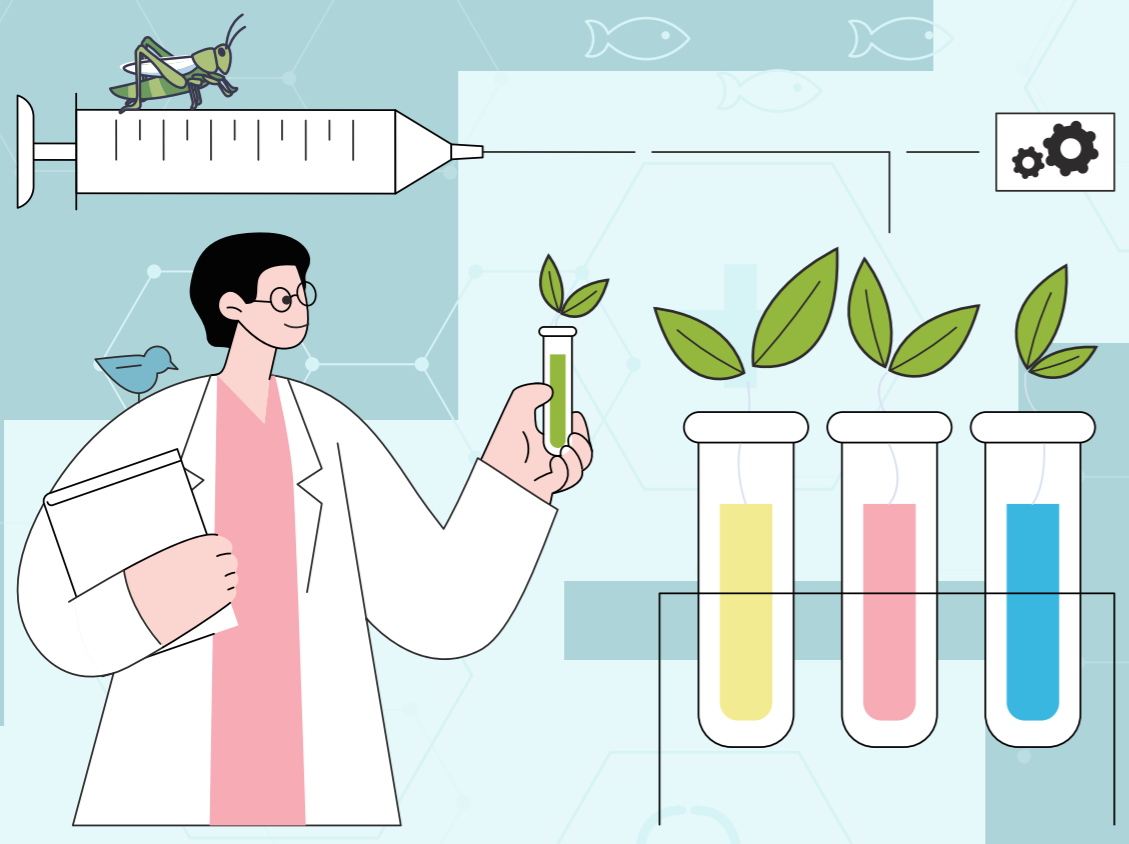




生命科学  
研究科は  
今 2026  
Vol.20

東北大学大学院  
生命科学研究科  
Graduate School of Life Sciences,  
TOHOKU UNIVERSITY



東北大学大学院  
生命科学研究科

紙面の制約から、ここにお知らせしたのは  
生命科学研究所に関するほんの一部の情報です。  
詳しくは生命科学研究科ホームページ  
<https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/>をご覧ください。  
2026年5月発行



東北大学「生命科学教育研究支援基金」へ  
ご協力をお願い  
[https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/  
outline/donation/](https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/outline/donation/)



## — 東北大学が国際卓越研究大学認定に認定・認可されました —

東北大学は2024年12月に日本初の国際卓越研究大学に認定・認可されました。「国際卓越研究大学」とは、世界トップレベルの研究を行い、その成果を社会や経済に還元できる大学を国が認定する新しい制度です。東北大学はこの第一号として、これまで重ねてきた歴史と国からの支援を原動力に、大学改革を加速させ、卓越した研究、人材育成、そして社会との共創を通じて、未来を切り拓いていきます。

# MOVE AND SHAKE.

知の加速が、世を動かす。

東北大学ではその専門分野において極めて高い業績を有し、かつ、先導的な役割を担うものに国際卓越研究者の称号を付与しています。

生命科学研究所においては2025年度に下記の研究者が国際卓越研究者として採用されました。

### 生命科学研究所関連の国際卓越研究者



**経塚淳子教授**(国際卓越)  
植物発生分野  
研究テーマ「環境に適応した植物の形づくりのしくみを分子レベルで理解する」



**佐藤伸一准教授**(国際卓越)  
機能化学プロテオミクス分野  
(主所属：学際科学フロンティア研究所)  
研究テーマ「タンパク質化学修飾法の開発とプロテオミクス研究への展開」



**奥村正樹准教授**(国際卓越)  
動的構造生化学分野  
(主所属：学際科学フロンティア研究所)  
研究テーマ「様々な疾患を誘発する"タンパク質の構造学的ふるまい"を理解する」

## — 教育研究支援・企画推進室(ASPO)が設置されました —

生命科学研究所では東北大学が国際卓越研究大学に認定されたことをうけて、2025年12月に教育研究支援・企画推進室(Academic Support & Planning Office: 略称ASPO)を設置しました。リサーチ・アドミニストレーター(URA)は1名増えて2名体制となり、研究支援および国際研究力強化の企画推進を行っています。また、教育の質向上のための教員1名、学生支援を担う教員として公認心理師免許、臨床心理士の資格を持つ教員1名の合計2名の教員が4月に着任しました。ASPOでは生命科学研究所の教育・研究活動を強力にサポートしていきます。

## — 知と社会をつなぎ、実装へとひらく — ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点

ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点(NP拠点)は、自然と社会がともに発展する「ネイチャーポジティブ発展社会」の実現を目指し、産官学連携による研究と社会実装を進めています。研究基盤と共創ネットワークを土台に、科学的知見を社会の意思決定や経済活動へとひらき、研究と実践が往復する循環を生み出しています。

### ■主なトピック

#### 1. 地域実装モデルの構築

東北大学大学院生命科学研究所と佐賀県唐津市は、地域のネイチャーポジティブの実現に向けて、連携協定を2025年7月17日に締結しました。唐津市との連携では、ネイチャーポジティブを地域経営の軸に据え、環境DNAなどの科学的手法を活用しながら、自然資本の把握と政策・産業振興との接続を進めています。地域で生まれる問いは研究を深化させ、新たな知見と社会的価値を生み出しています。



調印式の様子  
左から、近藤倫生教授(NP拠点長)、彦坂幸毅生命科学研究所長、唐津市の峰達郎市長、脇山秀明副市長

#### 2. ネイチャーポジティブ実践のための手引き公開

拠点での研究・実証をもとに、参画機関であるアマタホールディングス株式会社と共同で「ネイチャーポジティブ実践のための手引き」を公開しました。本手引きは、「ランドスケープアプローチ」に基づき、自然の保全・回復と地域の価値創造を同時に実現するための実践ガイドです。

ネイチャーポジティブを“理念”にとどめず、現場で機能する実践へとつなぐ基盤づくりを進めています。



詳細はコチラ <https://www.naturepositive-hub.jp/topics/533/>

#### 3. ネイチャーポジティブ・キャリアフェスタ開催 — 人材循環の創出

社会実装を担う人材の育成を目的に、キャリアフェスタを東京・仙台で開催しました。ネイチャーポジティブの最前線で活躍する研究者、企業、自治体関係者など多様なプレイヤーと直接対話できる場を創出し、専門分野を越えて知が行き交い、自然と経済を両立させるキャリアの可能性を具体的に描く機会となりました。



キャリアフェスタの講演の様子



キャリアフェスタの集合写真

現在は、大学と社会が交差する共創拠点「Nature Positive Innovation Base(NPIB)」の構想も進行中です。偶然の出会いから問いが生まれ、実証や社会実装へとつながる“縁側”のような空間として、学生や研究者が主体的に参画できる場をひらいていきます。

NP拠点は、研究を社会へとひらき、社会からの問いを再び研究へと還元させながら、自然と人が調和する新しい社会のかたちを実装していきます。その起点として、私たち自身が挑戦を重ねていきます。

経塚淳子教授(国際卓越)が令和7年(第19回)みどりの学術賞を受賞しました

植物発生分野の経塚淳子教授がみどりの学術賞を受賞しました。「みどりの学術賞」は、国内において植物、森林、緑地、造園、自然保護等に係る研究、技術の開発その他「みどり」に関する学術上の顕著な功績のあった個人に授与する賞です。賞の授与は、みどりの月間(4月15日から5月14日)に開催される「みどりの式典」(令和7年は4月25日開催)において、天皇后両陛下ご臨席の下、内閣総理大臣から行われました。さらに、令和7年8月2日にはみどりの学術賞受賞記念トークイベントが日本科学未来館にて行われました。

「植物の分枝制御機構とその進化的成立過程の解明」に関する功績

植物は枝分かれを繰り返すことで驚異的な成長力と生産力を維持しており、イネの収量も花序の分枝様式に依存しています。経塚教授は、イネの変異体解析を通じて、分枝制御に関する植物ホルモン「ストリゴラクトン」の発見と、その生合成・信号伝達の分子メカニズムの解明を先導しました。また、花序の分枝や茎頂分裂組織の維持に関わる重要遺伝子群(LOGやTAWAWA1等)を次々と特定し、イネ科植物の発生学における基礎概念を確立しました。

さらに、サイトカイニン生合成遺伝子「LOG」を同定し、茎頂分裂組織の維持における局所的なホルモン合成の重要性や、幹細胞分裂の非対称性をもたらす仕組みを明らかにしました。

また、コケ植物を用いた解析から、ストリゴラクトンの起源が根圏の共生シグナル物質であり、受容体の遺伝子重複を経て段階的に植物ホルモンとしての機能を獲得したことを突き止めました。これらの成果は、植物の環境適応と成長制御の基本法則を解明する上で極めて重要な意義を持ちます。

これらの業績に加えて、経塚教授は日本植物生理学会会長への就任や教科書の監修・翻訳を通じ、植物科学の教育と普及に多大な貢献を果たしています。



「みどりの学術賞授賞式」(画像提供:内閣府)



みどりの学術賞記念トークイベントの講演の様子1  
(画像提供:日本科学未来館)



みどりの学術賞記念トークイベントの講演の様子2  
(画像提供:日本科学未来館)

温室効果ガス削減効果を高めたダイズ・根粒菌共生系を開発  
—農地からの一酸化二窒素(N<sub>2</sub>O)放出を抑制する革新的技術—

科学研究は異分野融合により進歩します。一見別々に見える、(i)植物と微生物の共生不適合性分子メカニズム研究と(ii)根圏における微生物窒素循環の研究の合わせ技で、農地から排出される温室効果ガスN<sub>2</sub>Oの削減技術ができました。土着根粒菌の共生を排除し、接種したN<sub>2</sub>O削減根粒菌がダイズへ優先して共生するように、植物と微生物をデザインしました。本成果は2025年のScience誌上でも、Engineering Agricultural Denitrificationという新たな概念で紹介されました。人類的な課題である地球温暖化を防止するために、このような学際研究をさらに進める必要があります。

Nishida H. et al. (2025) Genetic design of soybean hosts and bradyrhizobial endosymbionts reduces N<sub>2</sub>O emissions from soybean rhizosphere. *Nature Communications*  
DOI: 10.1038/s41467-025-63223-6

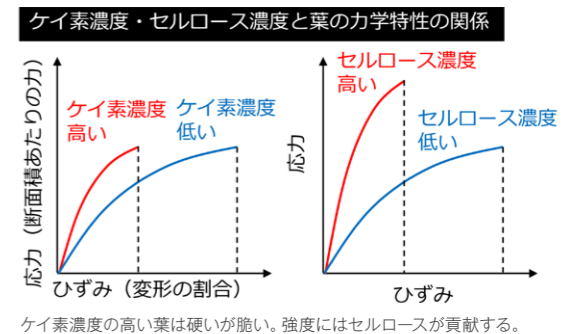


生命科学研究所灌水生態系野外実験施設(大崎市鹿島台)で実施したダイズ根圏のN<sub>2</sub>O発生削減の圃場実証試験

植物のケイ素利用にかかる制約の解明に迫る 葉の脆さがケイ素利用のデメリット?

イネをはじめとする一部の植物は、ガラスの主成分であるケイ素を用いて葉を支持することが知られています。一方で、多くの植物の葉はケイ素をほとんど含まないため、ケイ素の利用にはメリットだけでなくデメリットもあると考えられます。本研究は葉のケイ素濃度と力学特性を多種間で比較し、①ケイ素は葉の硬さには貢献するが強度には貢献しないこと、②ケイ素濃度の高い葉はより小さな変形で壊れる(つまり脆い)ことを明らかにしました。ケイ素に由来する葉の脆さがケイ素利用のデメリットになることを示唆した本研究は、ケイ素を利用する種と利用しない種にどのような選択圧がかかっているかを理解するための足掛かりとなると期待されます。

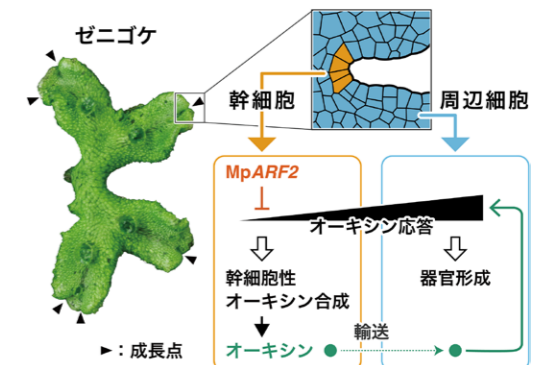
Kajino H. et al. (2025) Across 33 broad-leaved deciduous woody species, silicon enhances leaf lamina stiffness but not tensile strength whereas cellulose enhances both. *New Phytologist*  
DOI: 10.1111/nph.70079



植物の永続的な成長を支える分子機構を解明 ~成長点の司令塔を担う転写因子が鍵~

植物は成長点にある幹細胞を起点に、生涯にわたり根や葉などの器官を作り続けます。こうした永続的な成長はどのように実現されているのでしょうか。本研究では、細胞の分化を促す植物ホルモン「オーキシン」に注目し、コケ植物ゼニゴケでその機能を解析しました。その結果、幹細胞ではオーキシンの作用を抑える転写因子 MpARF2 が働き未分化状態を維持していること、一方でMpARF2は幹細胞におけるオーキシン合成を促し、周囲の細胞の分化を制御していることを突き止めました。本研究により、幹細胞はオーキシンによって周辺細胞に器官形成を指示しつつ、自らはその影響を受けない「発生の司令塔」であることが明らかになりました。

Flores-Sandoval E. et al. (2026) The B-class auxin response factor MpARF2 is essential for meristem organization in free-living plant gametophytes. *Current Biology*  
DOI: 10.1016/j.cub.2025.11.015



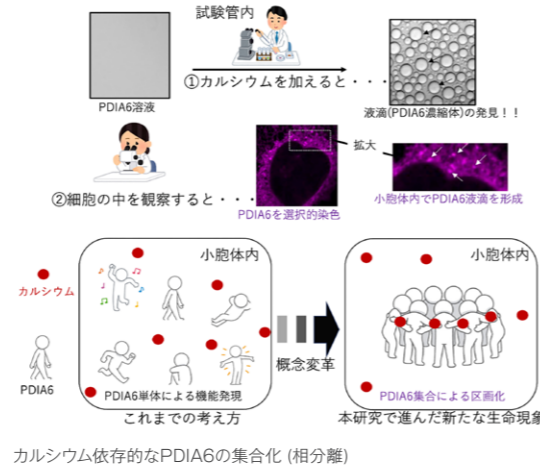
幹細胞は未分化な状態を保ちつつ、その周辺では細胞が分化して器官形成するしくみが明らかになりました。

# 研究トピック

## タンパク質品質管理に関わる小胞体内の新区画を発見 ～糖尿病、ALS、アルツハイマー症などに対峙する革新的治療法開発に光～

細胞内が備えるタンパク質品質管理機構が破綻すると、アルツハイマー症など様々な神経変性疾患を引き起こすと考えられています。最近我々は、プロテインジスルフィドイソメラーゼ(PDI)ファミリーのひとつであるPDIA6が、哺乳動物細胞の小胞体内で、カルシウム依存的に相分離を示すPDIA6を発見しました。相分離したPDIA6は、その区画内でフォールディングを促進する機能を有することを明らかにしました。従来多くの研究者は小胞体内が一様な環境と考えてきましたが、当研究室では小胞体内が区画化されることを示しており、今後小胞体研究が再定義されると期待できます。また、PDIA6関連の神経変性疾患に関しPDIA6相分離を標的とした創薬への展開が期待されます。

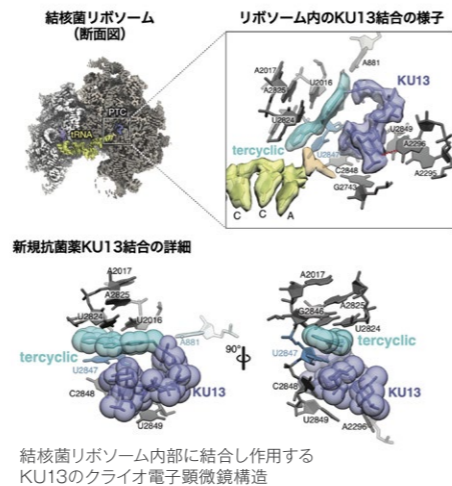
Lee Y-H et al. (2025) Ca<sup>2+</sup>-driven PDIA6 biomolecular condensation ensures proinsulin folding. *Nature Cell Biology*  
DOI: 10.1038/s41556-025-01794-8



## 選択的な糖修飾法を用いて肺非結核性抗酸菌症の治療薬候補を開発 ～薬剤耐性菌に有効となる新規抗菌薬開発に期待～

既存の抗菌薬の効果を無効化する薬剤耐性は、人類の公衆衛生上の脅威となっています。肺非結核性抗酸菌(NTM)症は、抗酸菌が肺に感染することで引き起こされ、薬剤耐性菌の出現により、薬剤耐性を克服する抗菌薬の開発が求められています。本研究では、慶應義塾大学、微生物化学研究所との共同研究で、薬剤耐性型抗酸菌リボソームに効果を示す、新規抗菌薬KU13の開発に成功しました。独自の立体選択性グリコシル化反応を用いて、新規アジスロマイシン誘導体を迅速に合成する手法を確立しました。クライオ電子顕微鏡を用いて、新規抗菌薬KU13の結合様式を可視化したところ、新しく導入されたモチーフが、リボソーム内部の構造リアレンジメントを引き起こし、新しい作用部位を自ら形成する、ユニークな作用機序が明らかになりました。

Isozaki Y. et al. (2025) Creation of a Macrolide Antibiotic against Non-tuberculous Mycobacterium Using Late-stage Boron-mediated Aglycon Delivery. *Science Advances*  
DOI: 10.1126/sciadv.adt2352



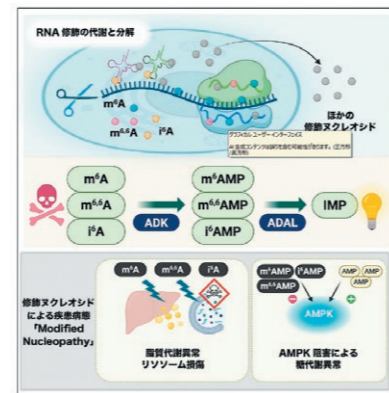
## RNA 修飾代謝による生体防御機構を解明 ～有害な修飾ヌクレオシドから体を守る仕組み～

化学修飾されたRNAが代謝されると修飾ヌクレオシドが生じますが、その機能や意義については十分に解明されていませんでした。

本研究では修飾ヌクレオシドのうち、m<sup>6</sup>A、m<sup>6</sup>mA、i<sup>6</sup>A が毒性を持ち、酵素ADKとADALによって無毒なIMPへ代謝されるという経路を発見しました。この経路が破綻すると修飾ヌクレオシドやその中間代謝物が蓄積して糖代謝や脂質代謝の異常が生じ、さらにはリボソームなどの細胞小器官の機能不全が起こることが毒性の原因であることを同定しました。

本研究によって同定された酵素の一部はすでにヒト疾患が報告されており、今後、修飾ヌクレオシドが病態解明や治療開発に繋がる可能性があります。

OGAWA A. et al. (2025) Adenosine kinase and ADAL coordinate detoxification of modified adenosines to safeguard metabolism. *Cell*  
DOI: 10.1016/j.cell.2025.07.041

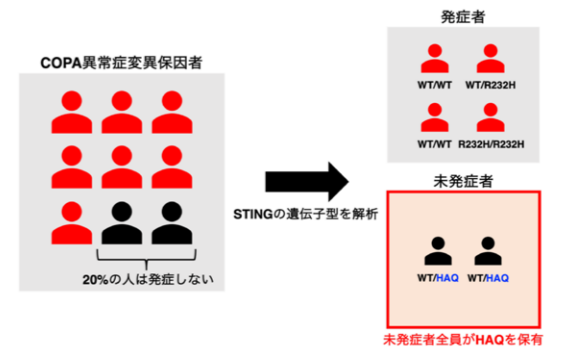


本研究の概要

## 難病COPA異常症の発症を抑制する遺伝子の発見 STING遺伝子の主要バリエーションによる炎症抑制

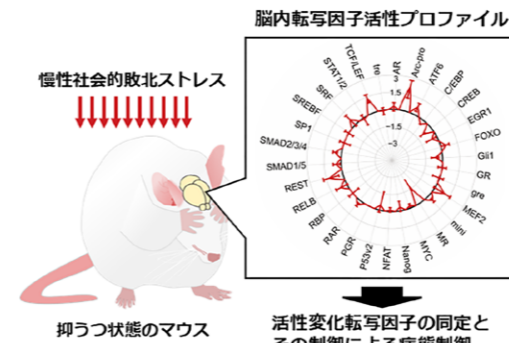
COPA異常症は、関節炎や間質性肺炎を主な症状とする難治性の遺伝性疾患で、COPA遺伝子の変異によって自然免疫の中核であるSTING経路が異常に活性化することが原因とされています。しかし、同じ変異を持っていても約20%の方は発症せず、その理由はこれまで明らかになっていませんでした。私たちは、発症しない方々に共通してSTING遺伝子の「HAQ型」バリエーションが存在することを見だし、このHAQ型がCOPA変異による過剰な免疫応答を完全に抑制することを明らかにしました。本研究は、STINGの遺伝的多様性が遺伝性炎症疾患の発症を左右する可能性を示した初めての報告であり、今後の新たな治療法開発につながる重要な知見です。

Simchoni N. et al. (2025) The Common HAQ STING Allele Prevents Clinical Penetrance of COPA Syndrome. *Journal of Experimental Medicine*  
DOI: 10.1084/jem.20242179



COPA異常症の変異保有者のSTING遺伝子型解析の結果、未発症者全員が「HAQ型STING」を保有していた。

## うつ病モデルマウスで 抑うつ状態からの回復に関わる脳内の転写因子を特定 脳内転写因子活性プロファイルによって明らかに



本研究ではマウスうつ病モデル脳内で多数の転写因子の活性を測定し、病態に関連する転写因子を明らかにしました。

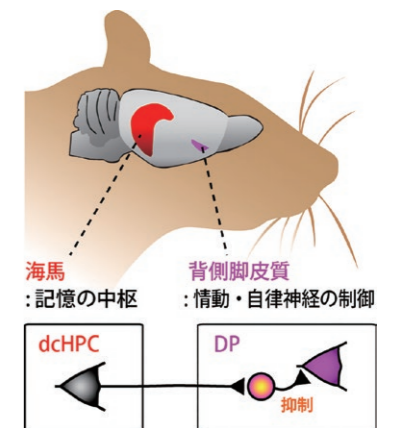
うつ病は長期にわたって脳が正常に作動しなくなる慢性疾患ととらえられます。実際、うつ病患者では脳内細胞で多くの遺伝子発現の変化が見られることが知られおり、その病理には慢性的な細胞状態変化が関わりと想定されています。脳機能発達分野の山本創大学院生(当時)、安部健太郎教授らのグループは、独自に開発した「脳内転写因子活性プロファイル法」を用いてうつ病モデルマウス脳内で異常な活性を示す転写因子を複数明らかにしました。また、同定した転写因子の活性を薬剤を用いて制御することによって抑うつ状態からの回復が早まることを明らかにしました。本研究は、うつ病の病理の理解と新規治療法の開発に貢献します。

Yamamoto H. et al. (2025) Transcription factors Lef1 and Rest stimulate recovery from depressive states. *Neuropsychopharmacology*  
DOI: 10.1038/s41386-025-02259-0

## 海馬と内側前頭皮質を結ぶ新たな神経回路の発見 ～記憶と感情、自律神経をつなぐ脳内ネットワーク～

嫌な記憶を思い出すと、胸が苦しくなったり冷や汗が出たりすることがあります。こうした「記憶」と「感情・自律神経」の連携は、危険を避けて生き延びるうえで重要なしくみです。脳神経システム分野のPaola Alemán-Andrade大学院生と大原慎也准教授らのグループは、記憶の中核である海馬の背側後部(dcHPC)が、自律神経系や情動の制御に関与する背側脚皮質(DP)と強く結びついていることを明らかにしました。さらに、この神経回路が多くの抑制性ニューロンに接続していることを突き止め、dcHPCがDPの活動を抑制的に調整している可能性を示しました。この発見は、記憶・感情・自律神経が脳内でどのように連動しているのかを理解するうえで、重要な手がかりとなります。

Alemán-Andrade P. et al. (2025) Dorsal-caudal and ventral hippocampus target different cell populations in the medial frontal cortex in rodents. *Journal of Neuroscience*  
DOI: 10.1523/JNEUROSCI.0217-25.2025



海馬 背側後部(dcHPC)が背側脚皮質(DP)の抑制性ニューロンに密に入力することを明らかにしました。

# 研究・教育・行事

## 友重秀介助教が2026年度日本薬学会奨励賞を受賞しました

活性分子動態分野の友重秀介助教が2026年度日本薬学会奨励賞を受賞し、2026年3月26日～3月29日開催の日本薬学会第146年会にて授賞式と受賞講演が行われました。

日本薬学会奨励賞は薬学の基礎および応用に関し、独創的な研究業績をあげつつあり、薬学の将来を担うことが期待される研究者に授与される賞です。

### 【受賞題目】

「生体高分子恒常性への化学介入に基づく次世代創薬化学基盤の創出」



## 小松愛乃特任助教が2026年度第33回日本植物生理学会奨励賞を受賞しました

植物発生分野の小松愛乃特任助教が2026年度第33回日本植物生理学会奨励賞を受賞し、2026年3月13日～15日に開催された日本植物生理学会年會にて授賞式と受賞講演が行われました。

日本植物生理学会奨励賞は植物科学関連分野において活躍する日本植物生理学会所属の若手研究者に授与される賞です。

### 【研究課題】

「植物の栄養繁殖を調節する分子メカニズムの研究」



## 2025年度生命科学科奨励賞（研究科内 Grant）

研究科では、基礎研究の支援と若手研究者の飛躍を助力することを目的に、生命科学科奨励賞（研究科内 Grant 制度）を平成16年度より実施しています。2025年度の受賞者名、所属、研究課題は以下の通りです。

### 【若手研究者】

石川 昂汰助教(生態発生適応科学専攻・統合生態分野)

「サブメソスケール渦が及ぼす魚類群集への影響解明」

林 真妃助教(分子化学生物学専攻・植物生殖システム分野)

「植物の自家不和合性を支える雌しべ乳頭細胞の浸透圧制御機構の解明」

Leanne Faulks助教(生態発生適応科学専攻・流域生態分野)

「Subject for research: Exploring the role of immuno-gene diversity, microbiome flexibility, and pathogen prevalence in invasive species adaptation」



## 2025年度 教職員受賞一覧

分野名	氏名 職位	受賞名	受賞年月
進化ゲノミクス分野	横山 隆亮 講師	Journal of Plant Research 2025年度Most Cited Paper Award	2025年 5月
植物発生分野	経塚 淳子 教授	令和7年(第19回)みどりの学術賞	2025年 5月
分子機能可視化分野	田口 真彦 助教	量子生命科学会 第7回大会 Best Presentation 賞	2025年 5月
超回路脳機能分野	松井 広 教授	公益信託成茂神経科学研究助成基金 講演会開催等助成	2025年 7月
生物多様性保全分野	千葉 聡 教授	2025年度日本進化学会学会賞	2025年 8月
生物多様性保全分野	千葉 聡 教授	木村資生記念学術賞(木村賞)	2025年 8月
細胞小器官疾患学分野	朽津 芳彦 助教	第46回日本炎症・再生医学会 優秀演題賞	2025年 9月
流域生態分野	牧野 渡 助教 占部 城太郎 名誉教授	Limnology Excellent Paper Award 2025	2025年 9月
動的構造生化学分野	奥村 正樹 准教授	公益財団法人アステラス病態代謝研究会 2025年度最優秀理事長賞	2025年11月
動的構造生化学分野	奥村 正樹 准教授	公益財団法人アステラス病態代謝研究会 2025年度優秀発表賞	2025年11月
機能生態分野	吉田 直史 特任研究員	東北植物学会 ポスター優秀賞	2025年12月
植物分子適応生理分野	大竹 桃 特別研究員PD	東北植物学会 口頭発表優秀賞	2025年12月
植物分子適応生理分野	大竹 桃 特別研究員PD	東北植物学会 奨励賞	2025年12月
応用生命分子解析分野	田中 良和 教授	東北大学 全学教育貢献賞	2026年 1月
植物発生分野	小松 愛乃 助教	2026年度第33回日本植物生理学会 奨励賞	2026年 3月
流域生態分野	宇野 裕美 准教授	日本生態学会 富地賞	2026年 3月
植物細胞動態分野	鈴木 秀政 助教	日本植物生理学会 MIRAI2030ロゴマーク最優秀賞	2026年 3月
活性分子動態分野	友重 秀介 助教	2026年度日本薬学会 奨励賞	2026年 3月

## 2025年度 学生受賞一覧

分野名	氏名	受賞名	受賞年月
応用生命分子解析分野	辻 実怜	Redox Week in Sendai Japan 2025 travel Award	2025年 4月
応用生命分子解析分野	野村 倅生	Redox Week in Sendai Japan 2025 travel Award	2025年 4月
応用生命分子解析分野	相澤 雄太	日本顕微鏡学会第81回学術講演会 優秀ポスター賞	2025年 6月
応用生命分子解析分野	野村 倅生	第25回日本蛋白質科学会年會 ポスター賞	2025年 6月
微生物遺伝進化分野	井嶋 咲空	第21回21世紀大腸菌研究会 ポスター賞	2025年 6月
超回路脳機能分野	山尾 啓熙	時実利彦記念神経科学優秀博士研究賞	2025年 7月
超回路脳機能分野	譚 婉琴	NSR Best 論文賞	2025年 7月
生体分子機能制御分野	馬場 好花	BCSJ Award for Poster Presentation(2025年 生体機能関連化学・生物無機化学・生命金属科学合同サマースクール)	2025年 7月
生体分子機能制御分野	Bocha Li	Best Poster Presentation (Methods and Applications in Fluorescence 2025)	2025年 8月
共生ゲノミクス分野	鈴木 涼太	植物微生物研究会第34回研究交流会 ポスター賞	2025年 9月
進化ゲノミクス分野	南條 完知	日本プランクトン学会 学生優秀発表賞	2025年 9月
マクロ生態分野	鈴木 碩通	日本陸水学会 最優秀口頭発表賞	2025年10月
レドックス制御分野	Shaoting Pan	SFRR Korea 2025 Outstanding Poster Award	2025年11月
流域生態分野	加藤 駿	第27回河川生態学術発表会 ポスター優秀賞	2025年11月
マクロ生態分野	鈴木 碩通	The Brian Moss Student Competition First Place	2025年12月
動物発生分野	中里 楓	MBSJ-EMBO Poster Award 2025	2025年12月
細胞小器官疾患学分野	小平 明日華	MBSJ-EMBO Poster Award 2025	2025年12月
マクロ生態分野	鈴木 碩通	日本生態学会東北地区会 優秀発表賞	2025年12月
マクロ生態分野	去石 灯	日本生態学会東北地区会 優秀発表賞	2025年12月
マクロ生態分野	鈴木 碩通	International Society of Limnology, The Brian Moss Student Competition First Place	2025年12月
動的構造生化学分野	渡部 マイ	2025年度生物物理学会北海道支部-東北支部合同例会 学生優秀発表賞	2026年 3月
生体分子ダイナミクス分野	石川 史恩	2025年度生物物理学会北海道支部-東北支部合同例会 学生優秀発表賞	2026年 3月
マクロ生態分野	Shen Yi	日本生態学会 ポスター優秀賞	2026年 3月
マクロ生態分野	鈴木 碩通	青葉理学振興会賞	2026年 3月
神経細胞生物学分野	北 智輝	東北大学 総長賞	2026年 3月
神経行動分野	吳 宏揚	生命科学科研究科長賞	2026年 3月
動物発生分野	宮本 知英	生命科学科研究科長賞	2026年 3月
動的構造生化学分野	渡部 マイ	生命科学科研究科長賞	2026年 3月
脳情報達達分野	宋 晨伊	生命科学科研究科長賞	2026年 3月
生物多様性保全分野	石井 康人	生命科学科研究科長賞	2026年 3月
応用生命分子解析分野	藤野 真帆	生命科学科研究科長賞	2026年 3月

## キャリア支援

博士前期課程・博士後期課程の修了後の学生の皆様のキャリア実現を支援するため、生命科学研究科では独自の実践的キャリアサポートを実施しています。研究に打ち込む日々を送る学生の中には、「基礎研究は企業から敬遠される」「博士後期課程に進学すると就職できない」といった、実態と異なるウワサに不安を感じる方も多いと思います。そこで当研究科では、理系人材の採用に精通した人事の専門家による個別のキャリア相談や各種キャリアセミナーを実施し、そうした間違った思い込みにとらわれることのない効率的なキャリア実現を支援しています。研究科で育んだ研究能力は就職活動の場でも強力な武器となります。本キャリア支援は、進路選択の考え方や、自身の強みの言語化や効率的な伝え方など、具体的な助言を受けられる貴重な機会です。博士後期課程の学生にとっても、アカデミアに限らない多様なキャリアパスを知る場となります。ぜひ積極的に活用し、可能性を自ら切り拓いてください。

また、2025年12月6日実施の保護者説明会では、修了生の進路状況、キャリア支援、経済的支援制度についてご説明するとともに、理系人事の専門家より就職活動全体の動向と当研究科学生の状況をご紹介します。また、3名の学生が研究生生活の実際を語り、学びの現場を共有しました。今後も学生・保護者双方に開かれた情報発信と支援の充実に努めてまいります。

**東北大学大学院 生命科学研究科** 就業支援センター  
**キャリア相談 2025年 4月**  
 現在就活中の方、これから就活予定の方、進路検討中の方へ

生命科学研究科では、独自のキャリア支援プログラムを実施しています。卒業生が就職活動で悩むこと、学業と就職活動の両立を支援しています。

実施日 各日の実施時間  
 4/1 (火) ① 10:00-10:45  
 ② 11:00-11:45  
 ③ 12:00-12:45  
 ④ 14:00-14:45  
 ⑤ 15:00-15:45  
 ⑥ 16:00-16:45

4/9 (水) ① 10:00-10:45  
 ② 11:00-11:45  
 ③ 12:00-12:45  
 ④ 14:00-14:45  
 ⑤ 15:00-15:45  
 ⑥ 16:00-16:45

4/16 (水) ① 10:00-10:45  
 ② 11:00-11:45  
 ③ 12:00-12:45  
 ④ 14:00-14:45  
 ⑤ 15:00-15:45  
 ⑥ 16:00-16:45

4/23 (水) ① 10:00-10:45  
 ② 11:00-11:45  
 ③ 12:00-12:45  
 ④ 14:00-14:45  
 ⑤ 15:00-15:45  
 ⑥ 16:00-16:45

4/30 (水) ① 10:00-10:45  
 ② 11:00-11:45  
 ③ 12:00-12:45  
 ④ 14:00-14:45  
 ⑤ 15:00-15:45  
 ⑥ 16:00-16:45

Zoomによるオンライン形式  
 電話予約 無料  
 予約受付 02-7344-1111

利用方法  
 1. 右記サイトにて「予約状況」を確認  
 2. 空いている日時の中からご希望の日時を、右記サイトにあるフォームにて申請

キャリア支援については、こちらのウェブサイト  
[\(https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/oncampus/career/\)](https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/oncampus/career/) をご覧ください。

通年ほぼ毎週実施している専門家との個別面談。進路全般や企業選びの相談、さらにエントリーシート添削、面接練習もできます。

2025年12月6日(土)  
 東北大学大学院生命科学研究科 オンライン保護者説明会  
**「生命科学研究科 学生の就職状況 7年間の変化」**  
 東北大学生命科学研究科 キャリア支援室  
 特任教授/人事コンサルタント 増沢隆太  
 2024年度 生命科学研究科 進路・就職活動アンケート結果  
 2025年3月卒業予定者を対象に、2024年10月に実施

保護者説明会でも理系人事の専門家より就職活動についてご説明いたしました。増沢隆太先生は出版・テレビ等でも活躍中です。

## 生命科学交流ミーティング

生命科学交流ミーティングは、東北大学大学院生命科学研究科に所属する組織で、生命科学研究科ダイバーシティ推進委員会のご支援のもと、さまざまな研究室から集った大学院生によって運営されています。生命科学研究科における研究室間の交流や共同研究の促進を目的とし、特に若手研究者同士のコミュニケーションの場を提供しています。

今年度も昨年度と同様にポスターセッションを実施しました。立食形式のフランクな雰囲気の中で行われ、学生同士が発表しやすい環境を提供できたと考えています。飛び入り参加も可能で気軽に参加できるため、学会発表に不安を感じている学生にとつての練習の場にもなるでしょう。通常の学会とは異なり、他分野の参加者が多いため、専門用語を使わずに説明する機会となり、本企画での発表は説明能力の向上にもつながる良い機会です。また、発表者だけでなく参加者にとつても、普段は触れることの少ない他分野の研究に出会うことで、自身の視野を広げるきっかけになるでしょう。来年度も引き続き、このような研究室間の交流の場を提供していく予定です。

また、私たちは本交流ミーティングをともに運営して下さる方を募集しています。お気軽にご連絡ください。



## 生態システム生命科学専攻 生態ダイナミクス講座

福島 誠子  
 統合生態分野  
 特任教授(研究)  
 (2025年4月着任)



## 脳生命統御科学専攻 協力教員

大和田 祐二  
 神経解剖学分野  
 教授  
 (2025年7月着任)



## 脳生命統御科学専攻 協力教員

高橋 真有  
 システム神経生理学分野  
 教授  
 (2025年7月着任)



## 脳生命統御科学専攻 神経ネットワーク講座

星野 歩子  
 脳神経システム分野  
 教授(クロスアポイントメント)  
 (2025年11月着任)



## 分子化学生物学専攻 階層的構造ダイナミクス講座

黒河 博文  
 生体分子ダイナミクス分野  
 講師  
 (2025年4月着任)



## 生態システム生命科学専攻 個体ダイナミクス講座

LEE HSIANG-TING  
 植物発生分野  
 特任助教(研究)  
 (2025年4月着任)



## 分子化学生物学専攻 分子ネットワーク講座

東谷 なほ子  
 分子遺伝生理分野  
 特任助教(研究)  
 (2025年4月着任)



## 分子化学生物学専攻 階層的構造ダイナミクス講座

小島 摩利子  
 分子機能可視化分野  
 助教  
 (2025年4月着任)



## 生態システム生命科学専攻 生態ダイナミクス講座

石川 昂汰  
 統合生態分野  
 助教  
 (2025年5月着任)



## 分子化学生物学専攻 分子ネットワーク講座

SEKERCI KERIMAN  
 分子遺伝生理分野  
 助教(研究特任)  
 (2025年8月着任)

